

氏名	神 戸 正 かん べ まさし
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 195 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	湘 南 地 域 に お け る 野 菜 直 売 に 関 す る 研 究

論文調査委員 (主査) 教授 栗原正信 教授 神崎博愛 教授 中嶋千尋

論 文 内 容 の 要 旨

ここに野菜直売とは、生産農家が共同的に直売所を設け、最終消費者に対して自家生産物の小売販売を直接的におこなうことである。本論文は大都市近郊地におけるこの問題をとりあげ、その実態、成立条件、価格形成、および農業経営との関連等について精細な調査を実施し、これにもとづいて流通論的ならびに経営学的研究をおこない、その成果をとりまとめたものである。

1. 一般に、野菜をめぐる流通の中心は卸売市場を介する多段階の間接的大量流通であり、したがっておもに主産地对大市場、さらに市場の機構および運営等が問題となっている。そして間接流通においては、段階の多段化によって流通費は増大の傾向をとり、ひいて消費者支払い価格と生産者受取り価格との開差の圧縮はきわめて困難な実情にある。これに対して著者が調査した湘南地方に成立している共同直売所は、野菜の多品目生産をおこなう農家みずからの経営する売場であって、鮮度需要と小口売買を特徴とする野菜の子売取引およびその価格形成において前者といちじるしい対照をなしているものである。

2. 近時、野菜作経営の主業化傾向のなかで、野菜作の多品目作付については、労働の過集約性と労働報酬の低位とを理由に、否定的見解をとるものが少なくない。著者は、直売農家が多様な固定顧客への直接的小売法をとることによって、多品目の野菜作を巧みに選択して野菜作の経営的特質を作付に生かしていることを明らかにし、そしてこのことは生産者が経験的な知恵によって、販売と狭義の経営とを調和せしめたものであると説明している。

3. 直接流通と間接流通との販売方法の差異による収益・費用概念を明確にし、進んで直売経営の成立条件を究明して、(1) 卸売市場においては上場不適品となるものも直売所においては商品化しうることから、実質的に商品化量が増大されること (2) 直売価格が相対的に高位安定的でありかつ売手側の価格決定力が比較的強いこと (3) 生産者が販売機能を担当することによって、間接流通の場合においては流通機能担当者に帰属する流通費部分および利潤部分が直売者の所得となりうることの3点を指摘、解明している。

4. 野菜作目別の経営成果指標と労働集約度指標とから作型別の特質を検討し、さらに直売農家の土地利用、地力維持機構、労働力利用の実態等を明らかにしたうえで、具体的経営事例について販売対応のための創出技術を指摘するとともに、経営改善についての提案をおこなっている。

論文審査の結果の要旨

最近、生鮮食料品の流通問題は、生産者はもちろん、一般消費者の立場からも、国民経済の視点からもきわめて重要かつ困難な問題となっている。したがって、この分野についての研究も続々として現われつつあるが、その多くは大市場を中心としたものか、あるいは、いわゆる野市のごときものをとりあげたとしても、依然として卸売機能をもつ市場に偏している。これに対して、著者は小売機能のみをもつ直売経営をとりあげたので、まず、そのテーマの新鮮さと、同時に著者が数年にわたってデータの蒐集のために注いだ努力とに注目せねばならない。一切のデータは著者みずからが現地において調査する以外には与えられていないからである。

つぎに著者のこの問題に対する洞察に注目せねばならない。著者はアメリカ合衆国留学中もこのテーマと類似の Farmer's market や Roadside stand について調査研究をおこなったが、彼の国においてはこれらが次第に消滅ないし変質しているのに対し、日本における近郊農業の性格からかならずしも直売経営は直ちにアメリカ的推移をとるものとはしない。そこに、やがて過去の歴史的な存在となるのではなく、未来あるものとして直売経営がとりあげられているのである。

著者は多年にわたって、特に近郊農業の研究に従事し、多くの研究的業績のもとにこの新しいテーマをとりあげたのである。したがってそれがテーマの新鮮さとかみあって、本論文においては多くの新発見および改善の具体的提案があらわれている。例えば、直売概念の明確化、販売法の相異による収益・費用概念の吟味、直売成立条件の解明、また提案としては、多品目販売の実態的分析をふまえての直売参加農家間における作目の競合・補完関係の調整、販売要因の相互関係と要因の日別変動の分析をふまえての販売促進のための商品の豊富化、近郊的条件に対応する経営改善の方策などがそれである。

以上のように、本論文は農業経営学・農産物流通市場論に貢献するだけでなく産業上寄与するところが大きい。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。